

東洋絵画会

第二回内国絵画共進会が開かれた明治十七年の秋には日本画界にもう一つの重要な出来事があった。それは東洋絵画会の発足である。同会は日本画各派を擁し、農商務省官僚の肝煎りで発足したもので、会長は農商務大輔品川弥二郎（天保十四年～明治三十三年）、副会長は野村素介（号素軒。天保十三年～昭和二年）であった。会員数は非常に多く、中には橋本雅邦や川端玉章なども名を連ねており、また、フェノロサも名誉会員の中に加えられている。『東洋絵画叢誌』（明治十七年九月創刊）は同会の機関誌である。同会の最大の事業は毎年一回開く絵画共進会であった。第一回は明治十九年秋に開かれたが、それは単にさきの内国絵画共進会の民営版とも言うべきもので、これと違って新味は無かった。ただ注目しておきたいことは、規約の中に、

第五條 本會ハ叢誌發賣ノ利益有志者ノ醵金ヲ以テ畫學校設立ノ資本ニ充ツ

第十二條 醵集金額一萬圓以上ニ達スルハ畫學校設立ニ着手ス可シ

という条項を設け、画学校設立に積極的姿勢を示していたことである。計画の内容を推し測るすべは無いが、同会の性格からみて恐らく前述のワグネルの提案を具体化することが主旨だったと考えられ

る。ただし、この計画は遅々として進まず、岡倉やフェノロサの官立美術学校設立運動に押されて立ち消えとなったようである。

鑑画会

『美術真説』によって日本画復興の方法を説き、大きな反響を呼び起こすとともに一躍有名になったフェノロサは、やがて鑑画会を拠点として独自の復興構想を実践に移すことになった。そもそも鑑画会というのはモースに心服していた刀剣商町田平吉が発案したもので、町田がフェノロサと相談して明治十七年二月に「和漢ノ事歴品格ニ関スル真理ノ講究」を目的とするクラブを結成したのがその始まりであった。当初は町田が会主をつとめ、活動の中心を新古画（文人画以外の各派日本画）の鑑定に置いていた。初会は同年三月九日、両國中村楼で開かれ、その後は各所で一週間おきに開かれたが、その際には狩野永恵、山名貫義、狩野友信、および永恵に狩野永探理信（マサシ）の名号を許されたフェノロサが鑑定委員となって持ち込ま



河瀬秀治

（『河瀬秀治先生伝』より転載）

れた絵を鑑定し、可とするものには全委員連署の鑑定状を交付した。また、毎回フェノロサやビゲロウが蒐集した古画を系統的に展示し、フェノロサが講演を行った。しかし、

会主の町田は第三回例会をもって退会し、以後はフェノロサが会務を司ることになり、活動内容にも変化が生じた。フェノロサには独創的な画家を集めてフェノロサ自身の理想とする方向に沿って制作をなさしめ、しかるべき作品を海外で売却するという事業計画があった。そのために活動の重点を鑑定から新画批評へ移し、画家教育に主力を注ぐこととなったのである。彼は新しい日本画を生み出すことを主眼とし、そのためには洋画の長所も採り入れる必要があるという方針をとったので、龍池会幹部の多くはこれを白眼視したが、中には河瀬秀治や岡倉覚三（明治十七年一月龍池会に入会して録事となった。）のような有力な理解者もいた。そこでフェノロサは彼らと相談の上、明治十八年初頭に鑑画会の組織を改革し、会頭河瀬秀治、理事岡倉覚三、会員狩野友信、狩野芳崖、橋本雅邦等々による新しい会として再発足させたのである。ほかに在米公使九鬼隆一（嘉永五年〔昭和六年〕が名譽会頭として後援し、元老院書記官有賀長雄がフェノロサの通訳者として協力した。会の事実上の統率者がフェノロサであったことはいうまでもない。

新しい鑑画会は明治十八年一月二十五日に初会を開いた。その後、同二十一年二月二十六日の第十回まで開いたことが確認されている。毎回フェノロサは新画を懇切に批評し、また、古画を展示し、講演を行った。第七回と第十二回は大会と称する新画展覧会にあて、そこでは優秀作に賞金を与え、フェノロサが批評演説を行った。第一回大会（明治十八年九月十日〜十四日）の主な出品は次のとおりであった。

一等賞（十五円）鮮斎永濯「僧祐天夢ニ不動ヲ見ル図」

二等賞（十円）山本松溪「冬山暮景」

三等賞（五円）狩野芳崖「伏龍羅漢」、橋本雅邦「山駅秋色」

四等賞（二円五十銭）狩野友信「松下人物」、岡倉秋水「鷺」、端館紫川

「水中群魚」、金子玉淵「栗樹秋禽」

その他出品者 安藤広近、三島蕉窓、狩野勝玉、遠藤広宗・狩野忠信、石渡玉壺、飯島光峨、江口親雄、尾形月耕、岡梅溪、芝永章・大久保一岳、結城正明、加藤竹斎、山田成章等々。

フェノロサは情実を排し、作品そのものの良し悪しによって賞を与え、評価の根拠を明示したので、大会の評判は頗る良かった。第二回大会（後述）においてはさらにこれを上回る成功を収めることになる。

狩野芳崖

狩野芳崖はフェノロサによる日本画復興運動には欠くことのできない画家であった。両者の出会いは日本近代絵画史上、あるいはまた本学史上記念すべき出来事であったといわねばならない。その時期は、明治十七年の第二回内国絵画共進会の際とするのが従来のごとくであったが、むしろ明治十五年説（山口静一著『フェノロサ』昭和五十七年四月、三省堂）の方が妥当であると思われる。恐らく明治十五年の第一回内国絵画共進会の際、顧問の任にあったフェノロサは、審査員が見向きもなかった芳崖の作品に注目し、激賞し、それがきっかけとなって芳崖が狩野友信に伴われてフェノロサを訪問し、初めて対面したのである。芳崖を知ったフェノロサは月給二